

勤務医部会だより

三道楽煩惱を再考する～脳科学と落語から



幹事 服部直樹
(豊田厚生病院)

この拙稿が掲載される時にはどうなっているかわかりませんが、3月下旬にとんでもないニュースが飛び込んできました。ロサンゼルス・ドジャース大谷翔平選手の通訳である水原氏が、違法賭博に手を染めて巨額の借金が発覚し、即刻ドジャースを解雇されました。この衝撃的なニュースは連日、日米で大きく取り上げられています。水原氏は長年大谷選手と寝食を共にしており、彼が賭博に関わっていることを大谷選手が本当に知らなかったのか、大谷選手が自身の銀行口座の管理をしていなかったのかなどが取り沙汰され、この一件が大谷選手の今シーズンの成績に影響を与えるのではないかと、多くの日本人が大谷選手の胸中を察するに余りあるといった心境でしょう。

水原氏がのめり込んだ賭博ですが、ギャンブル依存症という言葉があるように、賭博には人を習慣性や耽溺性の底なし沼に引き摺り込む、魔法のような誘惑が潜んでいます。日本でも古くから「飲む・打つ・買う」という言葉があるように、人として墮落してしまう途轍もない魔物に、たやすく魅了されてしまうのは洋の東西を問わないようです。水原氏がのめり込んだ賭博、つまり「打つ」ですが、種類は様々です。彼はスポーツ賭博でしたが、もっぱら有名なのはルーレットやバカラです。日本でも麻雀、パチンコ、競馬・競輪など多種多様です。ちなみに大王製紙の御曹司の井川意高氏やバドミントンの桃田選手はバカラ賭博でマスコミに取り上げられたことは皆さんもご存知でしょう。

落語の世界では聖人君子はまず出て来ず、専ら粗忽な人間が登場して、それを笑い飛ばすのが真骨頂です。タイトルにある三道楽煩惱はサンドラ煩惱といい、酒・賭博・遊郭で身を滅ぼす哀れな輩がいつぱい出てきます。落語の賭博といえば、丁半博打で賽子を二つ壺皿に入れて偶数(丁)か奇数(半)かを予想して、金を賭けます。座頭市でもお馴染みのシー

ン、いかさまを見破った勝新太郎演ずる座頭市の太刀捌きが見どころの一つです。博打噺の落語といえは「へっつい幽霊」が頭に浮かびます。噺の大詰めでは任侠と幽霊が丁半勝負をするという奇想天外な展開となり、一気にオチがやってくる至高の逸品です。

脳科学の立場から依存症を考える時、報酬系という神経回路システムが重要になります。褒めて伸ばすと言われますが、人間というものの褒められて悪い気はしません。実はこの時、脳内では報酬系回路が作動しています。中脳の腹側被蓋野からドーパミン作動性ニューロンが投射され、この刺激は大脳辺縁系の側坐核や扁桃体で制御されます。この報酬系が正常に作動しているときはいいのですが、快楽と欲求とがブースターとなり、報酬系の過剰亢進が起り、依存症に至るとされています。このドーパミン作動系はパーキンソン病でも障害されますが、薬剤治療の副作用で報酬系の障害が誘発されて、衝動制御障害に至ることがあり、病的賭博や性欲亢進、買い物依存などが見られます。

人間は弱いもので、どうしても欲に溺れることがあります。それを抑えるのが前頭葉であり、このおかげで人間の礼節が保たれます。サンドラ煩惱はこの抑止効果を失った、人間の悲しい性なのでしょう。酒に溺れた亭主を、妻が「仕事に行っておくれよ」と送り出すところから始まるのが落語「芝浜」です。飲んだくれの亭主が、一切酒を絶ち、人が変わったように魚屋として働きます。3年経って立派な仕出屋となり、奉公人も幾人か雇うほどになります。大晦日に妻から真実を告げられ、酒を勧められた時、ふっと放たれる亭主のサゲは涙を誘います。大屋敷の若旦那が吉原通いのため勘当される噺「唐茄子屋政談」では、一文なしになった若旦那が叔父さんに助けられ、肩に天秤を担いで、商いをして、最後には貧しい母子の人助けに一役買うことになります。酒飲み亭主も廊通いの若旦那も前頭葉がしっかりしていたのでしょう。いつの時代も人は同じです。人が進歩するのではなく、科学が進歩しているのです。落語は近代の脳科学誕生前の話芸ですが、実に滋味に富む噺がたくさんあります。昨今の、煩惱に苛まされている日本の代議士・首長・地方議員には是非勧めたいものです。